

VII. 等長変換・モデル

(2017年5月30日訂正)

等長変換 リーマン多様体 $(M, \langle \cdot, \cdot \rangle)$ と $(M', \langle \cdot, \cdot \rangle')$ のあいだの写像 $f: M \rightarrow M'$ が等長写像である¹⁾とは、任意の $P \in M$ と $v, w \in T_P M$ に対して

$$\langle df(v), df(w) \rangle' = \langle v, w \rangle$$

が成り立つ、すなわち f の微分写像が内積を保つことである。

補題 7.1. リーマン多様体 $(M, \langle \cdot, \cdot \rangle)$ と $(M', \langle \cdot, \cdot \rangle')$ の次元が等しいとき、等長写像 $f: M \rightarrow M'$ は局所微分同相、すなわち、任意の $P \in M$ に対して P の M における近傍 U が存在して $f|_U: U \rightarrow f(U)$ が微分同相写像になる。

証明. 各点 P に対して $(df)_P: T_P M \rightarrow T_{f(P)} M'$ は内積を保つ線形写像である。とくに

$$\langle (df)_P(x), (df)_P(x) \rangle' = \langle x, x \rangle$$

なので $(df)_P$ の核は零空間。したがって $(df)_P$ は単射。さらに $T_P M$ と $T_{f(P)} M'$ は同じ次元を持つので、次元定理より $(df)_P$ は全射であることがわかる。すなわち微分写像が全単射であるから、 P の近傍で微分同相である。□

補題 7.2. 等長写像は共変微分を保つ。すなわち、写像 $f: M \rightarrow M'$ がリーマン多様体 $(M, \langle \cdot, \cdot \rangle)$ と $(M', \langle \cdot, \cdot \rangle')$ の間の等長写像ならば、 M の任意のベクトル場 X, Y に対して

$$\nabla'_{df(X)} df(Y) = df(\nabla_X Y)$$

が成り立つ。ただし ∇ と ∇' はそれぞれ $(M, \langle \cdot, \cdot \rangle)$, $(M', \langle \cdot, \cdot \rangle')$ の共変微分である。

証明. 簡単のため M と M' が同じ次元を持つ場合を考える²⁾ とくに $P \in M$ の近傍 U で $f|_U$ は微分同相写像を与えている。とくに P の近傍の座標系と $f(P)$ の近傍の座標系で共通のものをとることができる。とくに f の等長性から、計量の成分 (g_{ij}) (超曲面の場合は式 (5.8))、それらからきまるクリストッフェル記号 Γ_{ij}^k (式 (5.12)) は共通なので、それらから定まる共変微分も共通である。□

測地線の方程式 (6.11) も共変微分 (クリストッフェル記号) から決まるから、次がわかる：

系 7.3. 写像 $f: M \rightarrow M'$ がリーマン多様体 $(M, \langle \cdot, \cdot \rangle)$ と $(M', \langle \cdot, \cdot \rangle')$ の間の等長写像ならば、 M の任意の測地線 γ に対して $f \circ \gamma$ は M' の測地線となる。

定義 7.4. リーマン多様体 $(M, \langle \cdot, \cdot \rangle)$ からそれ自身への微分同相写像 f で等長写像となっているものを $(M, \langle \cdot, \cdot \rangle)$ の等長変換という。

定義から次はすぐにわかる (問題 VII-1):

補題 7.5. リーマン多様体 $(M, \langle \cdot, \cdot \rangle)$ の等長変換全体は写像の合成に関して群をなす。

補題 7.5 の群を、リーマン多様体 $(M, \langle \cdot, \cdot \rangle)$ の等長変換群という³⁾⁴⁾。

擬直交行列 空間型の等長変換群を特定するために、擬直交行列の復習をしておこう。正の整数 n と整数 $0 \leq t \leq n$ に対して

$$O(n, t) := \{A \in M_n(\mathbb{R}) \mid {}^t A J_{n-t, t} A = J_{n-t, t}\} \quad J_{n-t, t} = \begin{pmatrix} -I_t & O \\ O & I_{n-t} \end{pmatrix}$$

を擬直交行列群、その要素を擬直交行列とよぶ。ただし $M_n(\mathbb{R})$ は実数を成分とする n 次正方行列全体の集合である。

²⁾この講義で必要なのは $\dim M = \dim M'$ の場合のみ。そうでない場合は M' の部分集合 $f(U)$ に制限して考えればよい。

³⁾等長変換群: the isometry group.

⁴⁾ここでは深入りしないが、等長変換群には位相空間の構造を与えることができ、とくに単位元を含む連結成分はリー群、すなわち群構造に加えて多様体の構造をもつ。この講義では、空間型の等長変換群を考えるが、これは具体的に表示でき、多様体の構造も入れることができる (注意?? 参照) ので、以上のことは深入りしない。

^{*})2017年5月23日

¹⁾等長写像: an isometry.

事実 7.6. • 擬直交行列の行列式は ± 1 である . とくに

$$\text{SO}(n, t) := \{A \in \text{O}(n, t) \mid \det A = 1\}$$

は $\text{O}(n, t)$ の部分群である .

- $t \geq 1$ のとき , 擬直交行列の左上の $t \times t$ 行列の行列式の絶対値は 1 以上である . とくに , $t = 1$ のときは一番左上の成分の絶対値が 1 以上である .

$$\text{O}_+(n, t) := \left\{ A = \begin{pmatrix} A_{11} & A_{12} \\ A_{21} & A_{22} \end{pmatrix} \in \text{O}(n, t) \mid \det A_{11} \geq 1 \right\}$$

は $\text{O}(n, t)$ の部分群となる (問題 II-2 参照) . ただし , A_{11}, A_{22} はそれぞれ t 次 , $(n - t)$ 次の正方行列である .

とくに $\text{O}(n, t)$ には $\frac{1}{2}n(n-1)$ 次元多様体の構造が入り , 群演算 (積と逆) は C^∞ -級写像を与えている . すなわち $\text{O}(n, t)$ はリー群である .

事実 7.7. リー群 $\text{O}(n, t)$ は連結でない . とくに

- $t = 0$ のとき , $\text{O}(n) := \text{O}(n, 0)$ の単位元を含む連結成分は $\text{SO}(n)$ である .
- $t \geq 1$ のとき $\text{O}(n, t)$ は , 行列式 , 左上の小行列式の符号によって 4 つの連結成分にわかれる . とくに , 単位元を含む連結成分は $\text{SO}(n, t) \cap \text{O}_+(n, t)$ である .

擬直交行列の定義から , 次のことがわかる :

補題 7.8. 正方行列 A が $\text{O}(n, t)$ の要素であるための必要十分条件は $A = (a_1, \dots, a_n)$ を列ベクトルに分解したとき , $\{a_1, \dots, a_n\}$ が \mathbb{R}_t^n の正規直交基底をなす , すなわち

$$\langle a_j, a_k \rangle = \begin{cases} -1 & (1 \leq j = k \leq t) \\ +1 & (t+1 \leq j = k \leq n) \\ 0 & (j \neq k) \end{cases}$$

となることである .

補題 7.9. 擬直交行列 $A \in \text{O}(n, t)$ の転置 ${}^t A$ も $\text{O}(n, t)$ の要素である .

証明 . 仮定より $J^t A J A = \text{id}$ ($J = J_{n-t, t}$, id は単位行列) だから $A^{-1} = J^t A J$ が成り立つ . とくに $\text{id} = A A^{-1} = A J^t A J$ なので , 両辺に右から J をかけると , $A J^t A = J$ となる . \square

これらを合わせると次が得られる .

系 7.10. 正方行列 A が $\text{O}(n, t)$ の要素であるための必要十分条件は , A の行ベクトル (の転置) が正規直交基底をなすことである .

補題 7.11. ローレンツ・ミンコフスキー空間 \mathbb{R}_1^{n+1} の時間的列ベクトル $x = {}^t(x_0, x_1, \dots, x_n)$ と行列 $A \in \text{O}(n+1, 1)$ に対して

$${}^t(y_0, \dots, y_n) := A x, \quad A = \begin{pmatrix} a_{00} & \dots & a_{1n} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{n0} & \dots & a_{nn} \end{pmatrix}$$

と書くと ,

$$\text{sgn } y_0 = \text{sgn } x_0 \text{sgn } a_{00} \quad \left(\text{sgn } x = \begin{cases} +1 & (x > 0) \\ -1 & (x < 0) \\ 0 & (x = 0) \end{cases} \right)$$

である . とくに x_0 と y_0 が同符号をもつための必要十分条件は $A \in \text{O}_+(n+1, 1)$ となることである .

証明 . 行列 A の最初の行からなる行ベクトルの転置 $\mathbf{a} := {}^t(a_{00}, a_{01}, \dots, a_{0n})$ は $\langle \mathbf{a}, \mathbf{a} \rangle = -1$ を満たしている .

$$\mathbf{a} = a_{00} \mathbf{e}_0 + \vec{a}, \quad \mathbf{x} = x_0 \mathbf{e}_0 + \vec{x} \quad (\mathbf{e}_0 = {}^t(1, 0, \dots, 0))$$

と分解しておけば , $-1 = -a_{00}^2 + |\vec{a}|^2$, また , \mathbf{x} が時間的であることから $-x_0^2 + |\vec{x}|^2 < 0$. したがって

$$\begin{aligned}
y_0 &= a_{00}x_0 + a_{01}x_1 + \cdots + a_{0n}x_n \\
&= a_{00}x_0 + \langle \vec{a}, \vec{x} \rangle \geq a_{00}x_0 - |\vec{a}| |\vec{x}| = a_{00}x_0 - \sqrt{a_{00}^2 - 1} |\vec{x}| \\
&> a_{00}x_0 - \sqrt{a_{00}^2 - 1} |x_0| \geq a_{00}x_0 - |a_{00}| |x_0|, \\
y_0 &\leq a_{00}x_0 + |\vec{a}| |\vec{x}| = a_{00}x_0 + \sqrt{a_{00}^2 - 1} |\vec{x}| \\
&< a_{00}x_0 + \sqrt{a_{00}^2 - 1} |x_0| \leq a_{00}x_0 + |a_{00}| |x_0|
\end{aligned}$$

が成り立つ．このことから結論が得られる．ここで，空間的ベクトル \vec{x}, \vec{a} に対するシュワルツの不等式を用いた． \square

擬直交変換 内積（一般に正定値とは限らない，非退化内積） $\langle \cdot, \cdot \rangle$ をもつベクトル空間 V の線形変換 $f: V \rightarrow V$ で

$$\langle f(\mathbf{v}), f(\mathbf{w}) \rangle = \langle \mathbf{v}, \mathbf{w} \rangle \quad (\mathbf{v}, \mathbf{w} \in V)$$

を満たすものを擬直交変換という．擬直交行列の定義から，次は明らか：

補題 7.12. 擬ユークリッド空間 \mathbb{R}_t^n の変換

$$f(\mathbf{x}) = A\mathbf{x} \quad A \in O(n, t)$$

は擬直交変換で， \mathbb{R}_t^n の擬直交変換はこの形のものに限る．

ユークリッド空間の等長変換

補題 7.13. 直交行列 $A \in O(n)$ と定ベクトル $\mathbf{b} \in \mathbb{R}^n$ に対して，ユークリッド空間 \mathbb{R}^n の変換

$$f: \mathbb{R}^n \ni \mathbf{x} \mapsto A\mathbf{x} + \mathbf{b} \in \mathbb{R}^n$$

は等長変換である．

証明．写像 f の逆写像は $f^{-1}(\mathbf{y}) = A^{-1}(\mathbf{y} - \mathbf{b})$ で与えられるので f は全単射．以下， f が等長写像であることを示す．点 $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n$ における写像 f の微分写像 $(df)_{\mathbf{x}}$ は

$$(df)_{\mathbf{x}}X = AX \quad (X \in T_{\mathbf{x}}\mathbb{R}^n = \mathbb{R}^n)$$

と表される．実際， $\gamma(0) = \mathbf{x}, \dot{\gamma}(0) = X$ となるような \mathbb{R}^n の曲線 γ をとると，

$$(df)_{\mathbf{x}}X = \left. \frac{d}{dt} \right|_{t=0} f \circ \gamma(t) = \left. \frac{d}{dt} \right|_{t=0} (A\gamma(t) + \mathbf{b}) = A\dot{\gamma}(0) = AX.$$

したがって，

$$\langle (df)_{\mathbf{x}}X, (df)_{\mathbf{x}}Y \rangle = \langle AX, AY \rangle = \langle X, Y \rangle.$$

すなわち f は等長変換である． \square

したがって， \mathbb{R}^n の等長変換群は $\mathbf{x} \mapsto A\mathbf{x} + \mathbf{b}$ ($A \in O(n)$) の形の写像全体を含む．次の定理から，実は等長変換はこの形に限る：

定理 7.14. ユークリッド空間 \mathbb{R}^n の等長変換 $f: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^n$ は

$$f(\mathbf{x}) = A\mathbf{x} + \mathbf{b} \quad A \in O(n), \mathbf{b} \in \mathbb{R}^n$$

と書ける．

証明．等長変換 $f: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^n$ が与えられたとき， $\mathbf{b} := f(\mathbf{0})$ とおき， $g(\mathbf{x}) = f(\mathbf{x}) - \mathbf{b}$ とおくと， $\mathbf{y} \mapsto \mathbf{y} - \mathbf{b}$ は等長変換であり（補題 7.13），等長変換の合成はまた等長変換である（補題 7.5）から， g は等長変換で，とくに $g(\mathbf{0}) = \mathbf{0}$ を満たす．この写像 g の原点における微分写像

$$(dg)_{\mathbf{0}}: T_{\mathbf{0}}\mathbb{R}^n = \mathbb{R}^n \longrightarrow \mathbb{R}^n$$

は内積を保つ線形写像（直交変換）なので，

$$(dg)_{\mathbf{0}}X = AX \quad A \in O(n)$$

となる行列 A が存在する．そこで $h(\mathbf{x}) := A^{-1}g(\mathbf{x})$ とおく．すると， A^{-1} も直交行列だから， h は \mathbb{R}^n の直交変換で，

$$(7.1) \quad h(\mathbf{0}) = \mathbf{0}, \quad (dh)_{\mathbf{0}} = \text{id}$$

を満たしている．以下， h が恒等写像であることを示そう．原点 $\mathbf{0}$ を初速度 \mathbf{v} で出発する測地線 $\gamma_{\mathbf{v}}$ は

$$\gamma_{\mathbf{v}}(t) = t\mathbf{v}$$

と書ける（補題 6.13）．ここで，等長変換 h により測地線は測地線に移されるから（補題 7.3）， $\tilde{\gamma} = h \circ \gamma$ はまた測地線である．とくに (7.1) から $\tilde{\gamma}(0) = \mathbf{0}, \dot{\tilde{\gamma}}(0) = \mathbf{v}$ が成り立つ．すなわち $\tilde{\gamma}(t)$ は $\gamma(t)$ と同じ初期条件を満たす測地線だから，

$$h(t\mathbf{v}) = \tilde{\gamma}(t) = \gamma_{\mathbf{v}}(t) = t\mathbf{v} \quad (\mathbf{v} \in \mathbb{R}^n, t \in \mathbb{R})$$

が成り立つ．とくに $t = 1$ とすれば

$$h(\mathbf{v}) = \tilde{\gamma}(1) = \gamma_{\mathbf{v}}(1) = \mathbf{v} \quad (\mathbf{v} \in \mathbb{R}^n)$$

となり, h が恒等写像であることがわかる. すなわち

$$\mathbf{x} = h(\mathbf{x}) = A^{-1}g(\mathbf{x}) = (A^{-1})(f(\mathbf{x}) - \mathbf{b})$$

だから $f(\mathbf{x}) = A\mathbf{x} + \mathbf{b}$ である. \square

双曲空間 次に双曲空間の等長変換を決定しよう. 双曲空間 $H^n(-k)$ は

$$H^n(-k) = \left\{ \mathbf{x} = {}^t\{x^0, \dots, x^n\} \in \mathbb{R}_1^{n+1}, \left| \langle \mathbf{x}, \mathbf{x} \rangle = -\frac{1}{k}, x^0 > 0 \right. \right\}$$

で定義された \mathbb{R}_1^{n+1} の超曲面とみなしている.

補題 7.15. 行列 $A \in O_+(n+1, 1)$ に対して,

$$f(\mathbf{x}) = A\mathbf{x}$$

と定めると, f は $H^n(-k)$ の等長変換を与える. ただし,

$$O_+(n+1, 1) = \left\{ A = \begin{pmatrix} a_{00} & \dots & a_{0n} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{n0} & \dots & a_{nn} \end{pmatrix} \in O(n+1, 1) \left| a_{00} > 0 \right. \right\}$$

である.

証明. 写像 f は \mathbb{R}_1^{n+1} から \mathbb{R}_1^{n+1} への写像だが, 定義域を $H^n(-k)$ に制限すると, $f(H^n(-k)) = H^n(-k)$ で, 微分同相写像 $f: H^n(-k) \rightarrow H^n(-k)$ を与えている. 実際, $A \in O(n+1, 1)$ から $\mathbf{x} \in H^n(-k)$ に対して

$$\langle f(\mathbf{x}), f(\mathbf{x}) \rangle = \langle \mathbf{x}, \mathbf{x} \rangle = -\frac{1}{k}.$$

また, $\mathbf{x} = {}^t(x^0, \dots, x^n)$, $f(\mathbf{x}) = {}^t(y^0, \dots, y^n)$ とおくと $x_0 > 0$, $a_{00} > 0$ から, $y_0 > 0$ であることがわかる (補題 7.11). したがって, $f(\mathbf{x}) \in H^n(-k)$ であることがわかる. さらに $g(\mathbf{x}) = A^{-1}\mathbf{x}$ とおけば, これが f の逆写像となるので, f は $H^n(-k)$ から自分自身への微分同相写像を与えている.

さらに, 点 $\mathbf{x} \in H^n(-k)$ に対して

$$(df)_{\mathbf{x}}X = AX \quad X \in T_{\mathbf{x}}H^n(-k)$$

が成り立つ (補題 7.13 の証明参照) なので,

$$\langle (df)_{\mathbf{x}}X, (df)_{\mathbf{x}}Y \rangle = \langle AX, AY \rangle = \langle X, Y \rangle$$

となり, f が等長写像であることが示された. \square

定理 7.16. 双曲空間 $H^n(-k)$ の等長変換は

$$H^n(-k) \ni \mathbf{x} \rightarrow A\mathbf{x} \in H^n(-k) \quad (A \in O_+(n+1, 1))$$

と書ける.

証明. \mathbb{R}^{n+1} の標準基底を

$$\mathbf{e}_0 := \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ \vdots \\ 0 \end{pmatrix}, \quad \mathbf{e}_1 := \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ \vdots \\ 0 \end{pmatrix}, \quad \dots, \quad \mathbf{e}_n := \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ \vdots \\ 1 \end{pmatrix}.$$

と書くと, これらはローレンツ・ミンコフスキー空間 \mathbb{R}_1^{n+1} の正規直交基をなしている. とくに

$$\mathbf{x}_0 := \frac{1}{\sqrt{k}}\mathbf{e}_0 \in H^n(-k)$$

となっている. 与えられた等長変換 $f: H^n(-k) \rightarrow H^n(-k)$ による \mathbf{x}_0 の像を $\mathbf{y}_0 := f(\mathbf{x}_0)$ と書くと,

$$\mathbf{a}_0 := \sqrt{k}\mathbf{y}_0 = \sqrt{k}f(\mathbf{x}_0)$$

は時間的単位ベクトルである.

ベクトル $\{\mathbf{e}_1, \dots, \mathbf{e}_n\}$ は点 \mathbf{x}_0 における $H^n(-k)$ の接空間の正規直交基底になっている. したがって, f が等長変換であることから

$$\mathbf{a}_j := (df)_{\mathbf{x}_0}(\mathbf{e}_j) \quad (j = 1, \dots, n)$$

とおけば $\{\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n\}$ は $T_{\mathbf{y}_0}H^n(-k)$ の正規直交基を与えている. 特に $T_{\mathbf{y}_0}H^n(-k)$ は $\mathbf{y}_0 = \mathbf{a}_0/\sqrt{k}$ の直交補空間だから, $\{\mathbf{a}_0, \dots, \mathbf{a}_n\}$ は \mathbb{R}_1^{n+1} の正規直交基底を与えている. とくに $\mathbf{a}_0 = {}^t(a_{00}, \dots, a_{0n})$ と書くと, $\mathbf{a}_0/\sqrt{k} \in H^n(-k)$ から $a_{00} > 0$. したがって, これらを並べた $(n+1)$ 次正方行列

$$A := (\mathbf{a}_0, \mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n)$$

は $O_+(n+1, 1)$ の元を与える. とくにその逆行列 A^{-1} は, 各 $j = 0, 1, \dots, n$ に対して \mathbf{a}_j を \mathbf{e}_j に写す線形写像を与えている. そこで $g := A^{-1}f$ とおく. すると

$$g(\mathbf{x}_0) = A^{-1}\mathbf{y}_0 = A^{-1}\left(\frac{1}{\sqrt{k}}\mathbf{a}_0\right) = \frac{1}{\sqrt{k}}A^{-1}\mathbf{a}_0 = \frac{1}{\sqrt{k}}\mathbf{e}_0 = \mathbf{x}_0,$$

$$(dg)_{\mathbf{x}_0}(\mathbf{e}_j) = A^{-1}(df)_{\mathbf{x}_0}(\mathbf{e}_j) = \mathbf{e}_j.$$

とくに $x \mapsto A^{-1}x$ が等長変換であること (補題 7.15) から g は等長変換で、

$$(7.2) \quad g(x_0) = x_0, \quad (dg)x_0 = \text{id}$$

を満たしている。

ここで、時刻 $t = 0$ で点 x_0 を速度 $v \in T_{x_0}H^n(-k)$ で通過する測地線 $\gamma_v(t)$ を考える：

$$\gamma_v(t) = (\cosh \sqrt{k}|v|t) x_0 + \frac{1}{\sqrt{k}} (\sinh \sqrt{k}|v|t) \frac{v}{|v|}.$$

系 7.3 より $\tilde{\gamma} := g \circ \gamma_v$ も測地線で、(7.2) より、 $t = 0$ で点 x_0 を速度 v で通過することがわかる。したがって、測地線の一意性より

$$(7.3) \quad g(\gamma_v(t)) = \tilde{\gamma}(t) = \gamma_v(t)$$

が成り立つ。ここで、 $H^n(-k)$ の完備性とホップ・リノーの定理 (事実 6.12) から、任意の点 $x \in H^n(-k)$ に対して、 x_0 と x を結ぶ測地線が存在する。すなわち、ある v と t が存在して $x = \gamma_v(t)$ と書ける⁵⁾ ので、対応

$$\mathbb{R} \times T_{x_0}H^n(-k) \ni (tv) \mapsto \gamma_v(t) \in H^n(-k)$$

は全射。したがって (7.3) から g は恒等写像でなければならない。したがって

$$x = g(x) = A^{-1}f(x)$$

となり、結論が得られた。□

球面 双曲空間の場合と全く同様の議論で、次がわかる (問題 VII-3) :

定理 7.17. 行列 $A \in O(n+1)$ に対して、写像 $x \mapsto Ax$ は球面 $S^n(k) \subset \mathbb{R}^{n+1}$ の等長変換を与える。逆に、球面の等長変換はこの形に書ける。

球面・双曲空間のモデル ここでは、球面・双曲空間を 1 次元高い次元の (擬) ユークリッド空間の超曲面とみなした。一方、これらの多様体の適切な座標系をとることで、外の空間を「忘れる」ことができる。

例 7.18 (球面の立体射影). 球面 $S^n = S^n(1) \subset \mathbb{R}^{n+1}$ 上の「北極」 $N := (0, 0, \dots, 1)$ 「南極」 $S := (0, 0, \dots, -1)$ を考え、

$$\pi_N(x) := \frac{1}{1 - x^{n+1}}(x^1, \dots, x^n), \quad \pi_S(x) := \frac{1}{1 + x^{n+1}}(x^1, \dots, x^n)$$

⁵⁾この場合は、 x から具体的に v と t が求まるので、ホップ・リノーの定理を持ちださなくてもよい (問題 VII-2)。

と定めると、

$$\pi_N: S^n \setminus \{N\} \rightarrow \mathbb{R}^n, \quad \pi_S: S^n \setminus \{S\} \rightarrow \mathbb{R}^n$$

は微分同相写像を与える。とくに \mathbb{R}^n の標準座標 (u^1, \dots, u^n) は $S^n \setminus \{N\}$, $S^n \setminus \{S\}$ の局所座標系を与える。この局所座標系に関する S^n の計量の表示は

$$ds^2 = \frac{4}{(1 + |u|^2)^2} ((du^1)^2 + \dots + (du^n)^2) \quad |u| = \sqrt{\sum_{j=1}^n (u^j)^2}$$

で与えられる⁶⁾。◇

例 7.19 (双曲空間の立体射影). 双曲空間 $H^n = H^n(-1) \subset \mathbb{R}_1^{n+1}$ に対して

$$\pi(x) := \frac{1}{1 + x^0}(x^1, \dots, x^n)$$

と定めると、

$$\pi: H^n \rightarrow D^n = \{X \in \mathbb{R}^n \mid |X| < 1\}$$

は微分同相写像を与える。とくに \mathbb{R}^n の標準座標 (u^1, \dots, u^n) は H^n 座標系を与える。この局所座標系に関する S^n の計量の表示は

$$ds^2 = \frac{4}{(1 - |u|^2)^2} ((du^1)^2 + \dots + (du^n)^2) \quad |u| = \sqrt{\sum_{j=1}^n (u^j)^2}$$

で与えられる。◇

⁶⁾とくに、座標系 (u^j) 上でのユークリッド的な角度と、リーマン計量 ds^2 による角度は一致する。このような座標系 (u^1, \dots, u^n) を共形座標、共形座標が取れるようなリーマン多様体を共形平坦である、という。

問 題 VII

VII-1 補題 7.5 に証明を与えなさい.

VII-2 双曲空間 $H^n(-k)$ 上の点

$$x_0 = \frac{1}{\sqrt{k}} {}^t(1, 0, \dots, 0)$$

と $x \in H^n(-k)$ を結ぶ測地線の x_0 における速度ベクトルを求めなさい.

VII-3 定理 7.17 を証明しなさい.

VII-4 例 7.18 の真似をして, 定曲率 k の球面の共形座標を求めなさい.